

ベゼクリク第九号窟寺銘文による誓願画の考察

平野真完

目次

- 一 誓願画の従来の研究
- 二 ベゼクリク第九号窟寺の誓願画
——その銘と画面——
- 三 誓願画補遺
- 四 根本説一切有部の律と誓願画
- 五 結び

本稿はベゼクリク Bezekliik, Bāzāklik⁽¹⁾ とその周辺から将来された、いわゆる誓願画 (Prāṇidhi-Bild, Prāṇidhana-Szene, Prāṇidhi-Szene)⁽²⁾ について、特にベゼクリク第九号窟寺の誓願画とその銘文を中心として、それと関係のある仏教文献について考えてみようとする。⁽⁴⁾

(1) ベゼクリクとは、中央アジアのトルファン地区の地名で、ここに数十の窟寺の遺蹟があり、前世紀末より今世紀にかけて探検され、その結果が公表されてくる。この窟寺の番号は今、A. Grünwedel: *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch Turkistan*, Berlin, 1912, 244。A. von Le Coq の番号が、A. Stein は別な番号を用いてる。この両者の対照は A. Stein: *Innermost Asia* vol. III, Oxford, 1928, Pl. 30, H. Andrews: *Catalogue of Wall Paintings from Ancient Shrines in Central Asia and Sistan*, London, 1948, Pl. iv を参照した。また

ベゼクリク第九号窟寺銘文による誓願画の考察

寺の番号を示すと次のようになる (Grünwedel 番号を先に出し、Stein 番号を次に括弧の中に示すことにする)。

2 (—), 3 (ii), 4 (iii), 8 (iv), 9 (v), 10 (vi), 11 (—), 12 (—), 19 (xii), 20 (—), 24 (—), 25 (ix), 26 (x), 29 (xi), 36 (—), 37 (—), 39 (—), 40 (xiv)

このうち、九号、四号、一九号、二号、二〇号、二五号窟寺の誓願画が知られてゐる。この外にもグリーンウェーデルは八号、一〇号、一二号、二四号、二九号、三六号、三七号、三九号窟の誓願画を知れてゐる (A. Grünwedel: *Altbuddhistische Kultstätten*, S. 227 ff.)。なお四号窟寺、と九号窟寺の中堂には大悲変相、八号窟と二六号窟には千仏像、一九号窟と二〇号窟には涅槃図、一一号窟と四〇号窟には法華経譬喻品、化城喻品などといふ壁画、八号窟には薬師浄土変相が描かれてゐるのであるといふ(後の註(4)にあける松本榮一博士及び熊谷宣夫氏の研究を参照)。

(2) 誓願画の名称については次節に述べる。なお誓願画と思われるものは、既刊の図版の中では次のようなものがある。

A. von Le Coq: *Chotscho*, Berlin, 1913, Tafel 17~29 (Tempel Nr. 9, Bāzāklik), Tafel 36, 37 (Tempel Nr. 2, Bāzāklik).

H. Andrews: *Wall Paintings from Ancient Shrines in Central Asia* recovered by Sir A. Stein, London, 1948, Pl. xiv~xix (Shrine iii, Bezekliik), Pl. xxvi (Bez. ix, A), Pl. xxvii, xxviii (Shrine xii, Bezekliik).

A. von Le Coq: *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, Neue Bildwerke, Berlin, 1926, Tafel 20 (Ruine α, Chotscho).

『西域考古図譜』上巻「絵画」(大正四年) 12~16図(唐宋間壁画断片(木頭溝))

これらの誓願画の特徴は、中央に巨大な仏像を描き、その左右の下に仏に供養している菩薩(国王、商人、婆羅門の姿をしている)が小さく描かれている。この図はいずれも典型的で、その種類もあまり多くない。四号窟と九号窟のそれは殆んど同一であり、二〇号窟、二五号窟、高昌βの図(A. Grünwedel: Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung, Fig. 79a)も九号窟の図と対照させるべきものであり、題材の種類は一五種をわずかに越えるくらいであろう。誓願画はベゼクリクの外に高昌古址(α、β)にあり、この外グリーンウェーデルによれば、Šorčūq (Grünwedel: Altbuddhistische Kultstätten, S. 210)、Kiris (ibid., S. 184)、Qyzyl (ibid., S. 43)にもあるという。ベゼクリクの壁画はウィゲル人のこの地域占拠以後、九一一世紀の制作といわれる。

(3) グリーンウェーデルは、南北に連なるこのベゼクリクの窟寺群を、北から順次に番号をつけて四〇を数えたが、九号窟(スタインでは五号)は窟寺群のほぼ中央に位置し、東面し、中堂と廻廊と南寄りの側堂から成っている。中堂と廻廊の壁画及び窟寺の構造は四号窟と殆ど同じである。

九号窟側廊の Le Coq: Chotscho, Tafel 16a には、向って右を向き一本の花を持つ三人の僧の像で漢字とウィグル文字で銘が書かれている。同 Tafel 16b も左を向く同様な三人の僧で、各々斜形グプタ文字の銘を記す。中堂の入口、同 Tafel 30a には一本の花をもち、剣を持ち、中国風の長い服を着、高い帽子をかぶり、髭をつけた三人の向って右向きの男の像で、ウィグル文字の銘が消えかけている。同 Tafel 30b は冠をつけ長い髪を結び、長い服をまとい、一本の花をもつ左向きの三人の女の像が描かれている。

中堂では(同 Tafel 31, 33, 32)、松本栄一博士によれば、行道天王図、毘沙門天図、大悲变相(千手観音)が描かれているのであるという(『燉煌画の研究』四一七~四六二、四六三~四七二、六五〇~六八一頁)。

側堂では同 Tafel 34 及び H. Andrews: Wall Paintings, Pl. H—F, A—F 中の Dakini の像である。Chotscho, Tafel 34 にはウィグル文字と漢字がみられる。Wall Paintings, Pl. xxi, Bez. v. 1 はこの窟寺の北壁にあるとされ、これも Dakini である。同 Pl. xxii, Bez. V. Flooring は肥った若い男の上半身であるが、何であるか

わからない。

廻廊では Chotscho, Tafel 17(Nr. 1)~29 (Nr. 15) の一三点が誓願画で、これに欠ける Nr. 12, 13 もまたルロックの記述によれば誓願画である。なお中堂入口、Wall Paintings, Pl. J-K は断片で、右手に数珠を持つ主仏(Andrews は観音菩薩とみている Catalogue of Wall Paintings, p. 79)の下半身と、仏の左下に長跪する女のような像がみえ、これも誓願画の断片かとも思われるが明らかでない。

以上が九号窟寺将来の壁画のすべてである。このようにみると、中堂、廻廊、側堂はそれぞれ壁画の主題を異にすることがわかる。なお誓願画についてみると Chotscho, Tafel 17, 18, 19, 22, 23, 24, 27 は主仏が向って右を向き、Tafel 20, 21, 25, 26, 28, 29 は主仏が左を向っているから、廻廊の左右の図の主仏は同じ方向を向っていることになる。

(4) 誓願画の研究としては、欧文のものはなお以下の節にも扱う。わが国における研究としては次の文献がある。

松本栄一博士『燉煌画の研究』(昭和十二年)

熊谷宣夫氏『ベゼクリク第十九号窟寺将来の壁画』(美術研究第二百二十二号、昭和十七年)

- 同『ベゼクリク第二十号窟寺将来の壁画』(美術研究第二百二十六号、昭和十七年)
- 同『ベゼクリク第四号窟寺将来の壁画』(美術研究第三百三十八号、昭和十九年)
- 同『ベゼクリク第十一号窟寺将来の壁画』(美術研究第五百五十六号、昭和二十五年)
- 同『ベゼクリク諸窟寺将来の壁画補遺』(美術研究第七十号、昭和二十八年)
- 同『ベゼクリク第八号窟寺将来の壁画』(美術研究第七十八号、昭和二十九年)
- 同『東トルキスタンと大谷探検隊』(仏教芸術一九(中央アジア特集)昭和二十八年)
- 小杉一雄博士『行像——ベゼクリクの行像壁画?』(仏教芸術一九、昭和二十八年)

一 誓願画の従来の研究

九号窟の誓願画 A. von Le Coq: Chotscho, Berlin, 1913, Tafel 17~29 と、九号窟と同じような結構をなす四号窟の誓願画の説明的記述 A.

Grünwedel: Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan, Berlin 1912, S. 239~241. 及び四号窟の壁画の図版 A. Andrews: Wall Paintings from Ancient Shrines in Central Asia recovered by Sir Aurel Stein, London, 1948, Plate XIV~XIX (Shrine iii, Bezeklik)が誓願画の基本的資料とすべき。

誓願画の名称は A. Grünwedel: Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung im Winter 1902~1903, S. 89 及び Prānīdhāna-Szene; 図2) A. Grünwedel: Altbuddhistische Kultstätten, Index 及び Prānīdhi-Bild; Le Coq: Chotscho, Tafel 17~29 及び Prānīdhi-Szene 及び H. Lüders 及び Prānīdhi-Bild 及び Die Prānīdhibilder in neunten Tempel von Bāzāklīk, Sitzungsberichte der K. preussischen Akademie der Wissenschaften, 1913, S. 864~884 = Philologica Indica, Göttingen, 1940, S. 255f) のことである。

九号窟寺の誓願画にはその上方に斜形グプタ文字⁽¹⁾で書かれたサンスケリット⁽¹⁾の銘が記されている。この銘はこの壁画の典拠を知る有力な手掛りとなる。はじめルコックは Chotscho の中で W. Siegling の力を借りて解説し独訳している。その後リューデルスはその銘と画とについて一論文を草し、銘の解説と独訳、銘と画との関係、この画と銘の背景、典拠について探求した (H. Lüders 前掲論文)。彼は Mahāvastu の Bahubuddha sūtra (III, pp. 224-250) には、過去仏の名は大部分異なるにしても、銘の文と同じ類型の偈が説かれていることを指摘した。次に、銘の中には三阿僧祇 (asamkheya) 劫に言及している点に着目し、これが Divyavadāna の Dharmarucyavadāna (Cowell and Neil) (ed., pp. 228-262) に説かれているのを見出した。

そしてこのことから誓願画は説一切有部の系列に由来すると結論した。そして玄奘がこの地でただ説一切有部の僧院だけを知っていたこと、この地で発見された写本も全部この部派のものを含んでいるように見えることをその傍証と考えた。そして「もし写本、漢文あるいはチベット語の中に、説一切有部の誓願行に関する記録が見出されるならば、我々がいま手にしている作品よりも、もっと厳密に画の銘と一致することである」(Philologica Indica, S. 263) としている。これに対してその翌年 E. Huber 及び Étude Bouddhiques I. Les Fresques Inscrites de Turfan (Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient, XIV, 1914, pp. 9~14) という論文で、漢訳とチベット訳の根本説一切有部毘奈耶薬事の中に、誓願画の銘に对照されるべき偈のあることを指摘し、さらに二、三の文字の解明にもつとめたのである。

以上で誓願画の銘に関する問題は一応解決したものと考えられる。⁽²⁾ここで私はこれまでの諸字者の研究のあとをたどりながら、その銘のローマライズと和訳を試み、そのあとで関係する文献や思想について、いささか考えてみようとするものである。

(1) 斜形グプタ (slanting Gupta) の字体は北道に使用された字体で、南道のロータンの写本にみられる正形グプタ (upright Gupta) とは区別される。後者には法華経や金剛般若経等の大乘經典の写本があるのに対して、前者には梵文阿含の断片や法句経等の小乗の文献が主である (A. F. R. Hoernle: Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan, Oxford, 1916. 参照)。なおマインツ探検隊がもたらした最近出版されている阿含の梵文經典は Śorcuq, Murtuq, Bāzāklīk, Tumsuq, Kyzil, Sängim, Yarkhoto 等から発見されたものであるが、斜形グプタからなるものと考えられる。例えば E. Waldschmidt: Das Mahāparinirvāṇasūtra

II. (Abhandlungen der deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, Jahrgang 1950, Nr. 2) Berlin, 1951
巻末の写真は Śorcuq と Tumśuq 発見の写本であるが、いずれも斜形グダの字体である。

なお阿含関係のサンスクリット経典には、どういふものがあり、どこで発見されたかを知るには、次の文献があげられる。

E. Waldschmidt: Bruchstücke Buddhistischer sūtras aus dem Zentralasiatischen Sanskritkanon 1 (Kleinere Sanskrit-Texte Heft IV), Leipzig, 1932

—, Das Mahāparinirvāṇasūtra I, II, III, (Abh. d. deut. AK. d. Wiss. zu Berlin, Philosoph.-hist. Kl., Jahrgang 1949, Nr. 1, 1950, Nr. 2, Nr. 3), Berlin, 1950-1951

—, Das Mahāvādānasūtra I, II, (Abh. d. deut. AK. d. Wiss. zu Berlin, Philosoph.-hist. Kl., Jahrg. 1952, Nr. 8, 1954, Nr. 3), Berlin, 1953, 1956

—, Das Catuspariśatsūtra I, II, (Abh. d. deut. AK. d. Wiss. zu Berlin, Philosoph.-hist. Kl., Jahrg. 1952, Nr. 2, 1956, Nr. 1), Berlin, 1952, 1957

—, Zur Śroṇakoṭikaraṇa-Legende (NAWG, 1950, Nr. 6)

—, Ein Fragment des Saṃyuktāgama aus den „Turfan-Funden“ (M476), (NAWG, 1956, Nr. 3)

—, Das Upasenāsūtra, ein Zauber gegen Schlangenbiß aus dem Saṃyuktāgama, (NAWG, 1957, Nr. 2)

—, Kleine Brāhmī-Schriftrolle, (NAWG, 1959, Nr. 1)

—, Identifizierung einer Handschrift des Nidānasāmyukta aus den Turfanfunden, (ZDMG, 1957, Band 107, S. 372~401)

—, Sūtra 25 of the Nidānasāmyukta, (BSOAS, vol. 20, 1957, pp. 569~579)

—, Die Einleitung des Saṅgītisūtra, (ZDMG, 1955, S. 298~318)

—, Ein zweites Daśabalasūtra, (Mitteilungen des Instituts für Orientforschung, Band VI, Heft 3, 1958, S. 382~405)

H. Hoffmann: Bruchstücke des Āṭānāṭikasūtra aus dem Zentralasiatischen

Sanskritkanon der Buddhisten, (Kleinere Sanskrit Texte, Heft V), Leipzig, 1939

K. Mittal: Dogmatische Begriffsreihen im Älteren Buddhismus 1, Fragmente des Daśottarasūtra aus zentralasiatischen Sanskrit-Handschriften, Berlin, 1957.

この外の文献については山田竜城博士『梵語仏典の諸文献』(平楽寺書店、一九五九年)参照。

(2) なお Donner と Klementz のもたらした壁画の銘は、E. Senart. (Journal Asiatique, 1900, pp. 353f) が扱っているが、これも誓願画に関係するものと考えられる。これについては後記第三節参照。

11 ベゼクリク第九号窟寺の誓願画

—その銘と画面—

以下に銘の解説和訳を試み、画面の特徴を見、他の類似の壁画等を参照しながら画面のもどづいてる物語についても考えてみよう。

銘の原文は Le Coq: Chotscho の図版と解説、独訳と、H. Lüders の解説、独訳 (Philologica Indica, S. 255f) 及び E. Huber の研究 (BEFEO XIV. 1914) により、漢訳の義浄訳根本説一切有部毘奈耶集事卷十五(大七五三七下)と、チベット訳 Hdul-ba gshi, Sman gyi gshi(東北目録 No. 1.6 デセ七五三七下 a 四、影印北京版西藏大藏經 No. 1030. (6) 四一卷二二三頁 b 五、二二三頁 c 四) を参照する。なお集事の梵文は N. Dutt, Gilgit Manuscripts, vol. III. pt. 1 にみられるが、今問題の箇所は欠けている。

なお画面の解明には上記の三研究の外に、グリエンウェーデルの報告する四号窟寺に関する詳細な記述 (Altbuddhistische Kultstätten, S. 237~241) を参照した。

1 (Chotscho, Tafel 17, Prāñihī-Szene Nr. 1—二五頁別図1参照)

// upasthito brāhmaṇena Mahendro lokanāyakaḥ

iyentākakarmāṇā ga [ndhaiḥ] kalenagaruṇa tatha

vihāraṃ kṛtvā sarvaiva ca upasthānai nimantrita

* iyentāka は Liders の指摘するように jentāka (a hot dry bath—Monier 梵

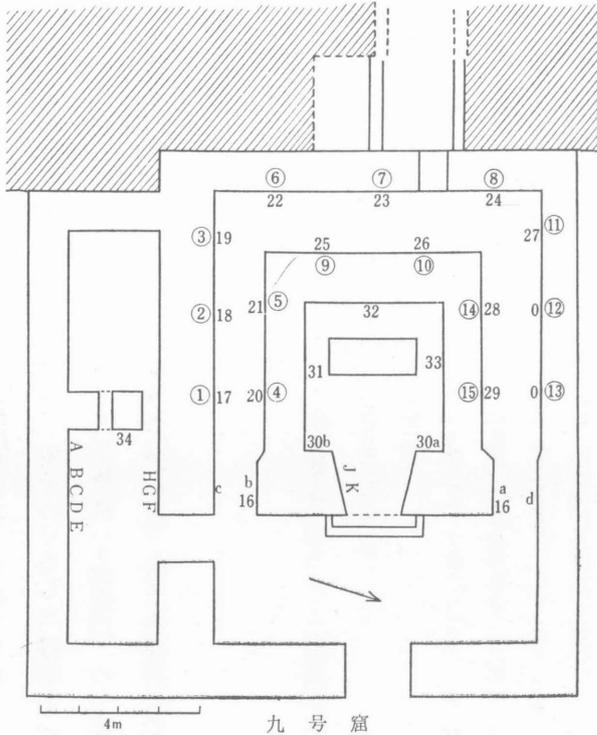
英辞典) であり, Pali の jantāghara の jantā にあたる。Mahāvīyūpatti 281,

89 (荻原雲来博士・梵漢対訳・仏教辞典 p. 239) の jontakāḥ (暖房) にあたる

(Philologica Indica, S. 264 参照)。

** kalēna-agaruṇā と考える。*** それぞれ—nair, —taḥ が正しい形である。

「世間の導師マヘーンドラは、婆羅門によって、暖房の仕事と、諸の香と、それから黒い沈香をもって奉仕された。それから精舎を作ってから、まさに一切の奉仕をもって招かれた。」



九号窟
A. von Le Coq: Chotscho, S. 14 (Plan des Tempels Nr. 9. Bāzāklik) による。この図で 16a~33, 34 は Chotscho の図版番号であり, ①~⑭は誓願画の番号である。A~K までは H. Andrews: Wall Paintings from Ancient Shrines in Central Asia の図版にみられるものを示す。

ベゼクリク第九号窟寺銘文による誓願画の考察

(漢訳) 我曾作國王、有佛名梵志、

以浴室香湯、依時沐浴佛、(大二四、七四上中)

(チベット訳) (ローマ字の表記法は東北帝国大学蔵版)

/ hji-grten hḍren-pa mi-dbañ-la /

/ bso-khan-las dan de-bshin-du /

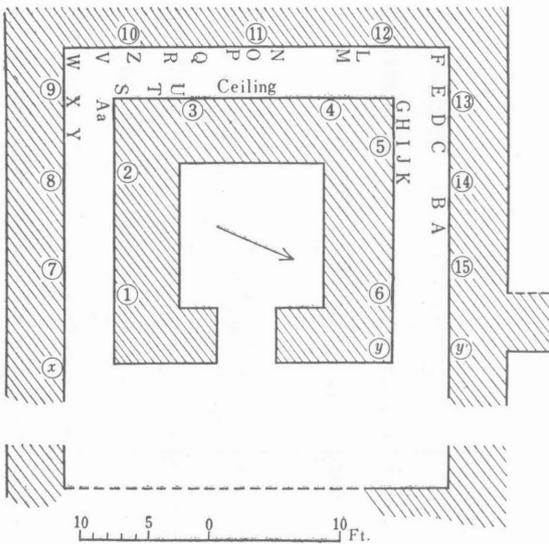
/ a-gar nag-pohi dri-dag-gis /

/ bram-zer gyur tshē shabs-hbrin byas /

(チベット版 kha 巻 276b6~7, 影印北京版 41 卷 222a2~3, * 北京版では sham-hbrin)

「世間の導師人王 (マヘーンドラ) に、暖房の仕事と、それから黒い沈香の香とによって、(私が) 婆羅門となったときに、奉仕いたしました。」

この図は四号窟寺の誓願画の主題七と対照される (A. Grünwedel: Altbuddhistische Kultstätten, S. 239 以下参照)。向って右をむいている仏の右下(向って右)にひざまずいて仏を招いている婆羅門がおり、左には



四号窟

H. Andrews: Catalogue of Wall Paintings from Ancient Shrines in Central Asia, Plate A (iii) による。A, B, ~ Z は Wall Paintings の図版を示す。①~⑭, ⑰は Grünwedel: Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan, S. 235, Fig. 509 に示すもので、①~⑭は誓願画の主題を番号で示したものである。

三一

盤の上に供物を捧げて立っている婆羅門がいる。また、その下方にも同じような婆羅門がいる。右上には高い扉をめぐらした建物がみえる。Lüdersはこの三人の婆羅門をば、一人の菩薩(=婆羅門)の一連の行為を示すものと考えた(Philologica Indica, S. 264)。右上の建物は銘にいう精舎と関係のあるものであろう。

2 (Chotscho, Tafel 18, Prapñidhi-Szene Nr. 2 — 一五頁別図2参照)

// Tamon[u]do mahābhāgo rūjabhūtena pūjitah
nānāratnavicitreṇa tulena* pratipāditaḥ //

* tulena 悉婆 Chotscho では tūla (=Wedel) と解している。H. Huber は tūryena と考える (BEFEO, XIV, Études Boudhigues, p. 12)。なお Fr. Edgerton: Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary には tūla の項の(2)に some musical instrument, prob. =tūra, (cf. Skt. tūrya) と記している。漢訳もサベット琴や箏の類に誤している。

「福分の大きいタモースダ(佛)は、王によって供養され、種々美しい宝物と器楽を捧げられた。」

(漢訳) 我曾作國王、有佛名住修、

以妙色珍寶、音聲而供養(七四上)

/ rgyal-por gyur tshe mun-ḥdsems-paḥi /

/ skal-chen-la ni rin-po-che /

/ sna-tshogs bkra-baḥi rol-mo-yi /

/ mchod-pa-dag-gyis bshens gsol-to /

(デルゲ版 kha 映 276 b5, 影印北京版41巻 222c8-d1)

「(私が)王となったときに、福分の大きい除闇(タモースダ佛)に、種々の宝物と美しい音楽の供養をいたしました。」

この図は四号窟の主題八と対照される。なお二六号窟の Wall Pain-

tings, Pl. xxvi. Bez. ix A はこの図の右下の人物に相当するようである。この仏の右下にひざまずいて合掌するのが王であって菩薩を示すのであろう。左に立って傘蓋を捧げるのも、リューデルスのいうように同一の王であろう。なお tamonuda とは「闇を破るもの」の意で、ペーリ文献では仏の形容のことはである(Suttanipāta, vv. 1133, 1136, Itivuttaka, pp. 32, 108)。

3 (Chotscho, Tafel 19, Prapñidhi-Szene Nr. 3 — 一五頁別図3参照)

// tatraiva nagare ramye Śikhināmā* yaśasvi
sambuddhāḥ* śreṣṭhibhūtena viharai* pujito* mayā //

* 正しいサンスクリットでは、それぞれ śikhī nāma, sambuddhaḥ, viharaiḥ, pūjito であるべきであろう。

「そこでまことにたのしい町において、シキンという名高い正覚者は、長者であった私によって、諸々の精舎をもって供養された。」

(漢訳) 我曾作長者、於彼大城中、

供養尸棄佛、建立寺舍塔(天二四、七四中)

/ groñ-khyer dgah-ba de-ñid-du /

/ ña ni tshoñ-dpon gyur-paḥi tshe /

/ sañs-rgyas gtsug-tor ḥjig-rten grags /

/ gtsug-lag-khañ-gis mchod-pa byas /

(デルゲ版 kha 映 277a 1~2, 影印北京版41巻 222d4)

「実にそのたのしい町において、私が商主となったときに、世間に名高い尸棄佛に精舎をもって供養した。」

この図は四号窟の主題九(Wall Paintings, Pl. xvi. Bez. iii W-Y)と対比される。なお二号窟の壁画の断片 Chotscho, Tafel 36a はこの図の左下と、二六号窟の壁画の断片(Wall Paintings, Pl. xxvi. Bez. ix. A)はこ

の図の右下の部分と相似している。この図の右下には、鎧を着け、左膝を地につけて合掌している若い男(王)がいる。これが菩薩を示すものと考えられる。とすれば銘にいう *śreṣṭhin*(商主、長者)とは合わない。なおリューデルスによれば、仏の後光に描かれている文様は孔雀の尾の眼状斑紋であり、*Sikhi*(孔雀)の名に相応するものであるという(*Philologica Indica* S. 268)。尸棄(*Sikhin*) 仏は、普通は過去七仏の第二仏であるが、この場合は必ずしもそうではない。薬事卷十五によればこの尸棄仏は第二の阿僧祇劫に出世した仏となっている。過去七仏の中の尸棄仏は更に第三の阿僧祇劫に出世したことになっている(大二四^{七五中})。

4 (Chotscho, Tafel 20, Prānidhi-Szene Nr. 4 — 二五頁別図4 参照)

// *Kṣemaṅkaro narādityo rājadhūtena pūjitaḥ*
jyentakakarmanā gandhā[h] kalenagaruṇa tatha
viharaṇam sahasraśis tu ṣaṣṭibhi sa nimantritaḥ //

「人間の太陽クシエーマンカラ(佛)は、王によって、暖房の仕事と、諸々の香と、それから黒い沈香とをもって供養された。しかも、六万の精舎をもつて彼(の佛)は招かれた。」

これに相当する偈は有部薬事この個所にはない。ただ第二行目は1の二行目と同一である。

この図は四号窟の主題一と対照される。左下に跪いて仏を招いている王が菩薩であろう。右に立っている王と王妃は盆の中に供物を盛って捧げている。この王も左下の王と同一の人物であろう。左上の建物は寄進した精舎であろうか。

Kṣemaṅkara は過去七仏については *Avadanagataka* 19(L. pp. 107~111) 撰集

百縁経一九(大四^{二二中下})にみえる。撰集百縁経によれば、過去乃往無量世のとき、差摩(*Kṣemaṅkara*)という仏が出世し、寶勝国に到ると王伽趨は群臣を將いて奉迎し仏を供養す。仏の説法を聴いて、王は無上菩提の心を発し、仏は王に記を授けて「汝は来世に作仏して釈迦牟尼と号すべし」というと。この物語がこの図と関係のあるものと考えられる。

5 (Chotscho, Tafel 21, Prānidhi-Szene Nr. 5 — 二五頁別図5 参照)

// *narendreṇa mayānanda Simha simhaparākrama*
cchatreṇa ratnadāṇḍena pūjito narap[uj]gavah //

「阿難よ。獅子の力量あり人間の雄者であるシンハ(佛)は、人王の私によつて、宝の柄のついた傘蓋をもって供養された。」

(漢訳) 我曾作國王 佛號超師子

我以寶幡蓋 供養此如來(大二四^{七四上})

/ *kun-dgah mi-dbañ ḥa gyur-pas /*
 / *seṅ-ge seṅ-gehi rtsal miaḥ-la /*
 / *rin-chen yu-ba-can gdugs-kyis /*
 / *mi-mchog-la ni mchod-pa byas /*

(チベット版 *kha* 巻 276b5~6, 影印北京版41巻 222d1~2)

「阿難よ。私が人王となって、師子の力量のある師子(シンハ佛)人中尊に、寶石の柄のついた傘蓋をもって供養をした。」

この図は四号窟の誓願画主題二(Altbuddhistische Kultstätten, S. 239, なお *Wall Paintings*, Pl. xvi, Bez. iii. Aa はその左上部の断片である)に相当する。左下にひざまずく王が菩薩であろう。その上に傘蓋をかざす人があるのは、これが王であることを示すものと思われる。右下には同じ王が傘蓋をかざしているが、これは王が仏に対して傘蓋を供養すること

を示すと考えられる。右下の王の更に右端にいる女性は王妃とおもわれる。左の下端に合掌してひざまずく小さな人物が描かれている。ルコックはこれをこの絵の寄進者であるという。

9 (Chotscho, Tafel 22, Pranihi-Szene Nr. 6 — 二五頁別図6参照)

// hasyāsvena suvarnena nātibhi ratnamuktibhiḥ

śaṅgān jinaṅgān pujaṛtham udyānaṃ śreṣṭhinaḥ kṛtām //

「象と馬、黄金、女達、宝物、真珠をもって、六人の勝者に供養するために長者によって園林が作られた。」

(漢訳) 其寺供七佛、奉施珍寶具

及以奴婢等 莊宅花園林 (大二四、七四中)

/ tshon-dpon gyur tshe rgyal-ba drug /

/ mchod-phyir glañ-chen rta gser dañ /

/ bud-med-rnams dañ nor-bu-yi /

/ rgyan-gyis bskyed-mos-tshal byas-so /

(チルテ版 kha 帙 277a2, 影印北京版41巻 222a5)

「(私が)商主となったときに、六人の勝者を供養するために、象、馬、黄金と、女たちと、宝石の飾りものをもって、園林を作った。」

この図は四号窟の誓願画の主題一〇(Altbuddhistische Kultstätten, S.

241, Wall Paintings, Pl. xv. Bez. iii. N-V 但下半部を欠く)に相当する。

また、二〇号窟にもこれに相当する図がみられる(Altbuddhistische Kultstätten, Fig. 566, 567)。なお大谷探検隊のもたらししたもの(西域考古図譜、絵画14)は主仏の下の左右の供養者の図であるが、二〇号窟のもので

あるという(熊谷氏『美術研究』一二六号)。それもこの図の下半部と対照せよ。

この図の右下には、帽子をかぶった髭の深い男が跪いて、盆に七つの袋を盛って仏に捧げている。その右端の人物も同様の容姿とポーズを示している。左下にも髭深い男がひざまずいている。それは鐘形の荷をになった馬とろばとらくだをつれている。この三人の人物のなかに菩薩がいるものと思われる。銘には *śreṣṭhin*(長者)というが、この図では武士(剣をおびている)のようにもみえる。

六人の勝者とは過去の六仏のようにも考えられる。この図ではただ一仏だけを描いており、また根本説一切有部律は同時に多仏の出現を認めないようであるから、六仏が同時に出世したのではなく、時を異にして出世した仏にそれぞれ菩薩は供養したのであるとも解されよう。

7 (Chotscho, Tafel 23, Pranihi-Szene Nr. 7 — 二五頁別図7参照)

// dāṣṭvā Dipaṅkaraṃ buddhaṃ dyūtimantaṃ yāsavinam

niḷapadmaḥ * puḷitavāṃ saptaḥir mānavas tadā

** dvitīyasamkheyāva [sāna]

* Chotscho では *tila* (胡麻) と読んでいるが, Lüders は *nila* とよむ。正しくは *nila* であるべきだろう。

** 正しくは *dvitīyasamkheyā* と考えられる。

「光明あり名高きディーパンカラ(燃燈)佛を見ては、そのとき学童は七つの青蓮花をもって供養した。」第二阿僧祇(劫)の終り。」

(漢訳) 次見燃燈佛 多聞甚可愛

以三七青蓮花 作梵志持供 (大二四、七四上)

/ bram-ze khyeḡu gyur de-yi tshe /

/ ḥod dañ grags-par ldan-pa-yi /

/ saṅs-rgyas mar-me-ndsad mthoñ-nas /

「(私)が婆羅門の息子となったときに、光明と名声をそなえた燃燈佛に会うては、七つの青い蓮花をもって供養した。」

この図の右下には、豊かな髪を地に敷いて五体投地している婆羅門がいる。その髪の上に仏が向って右を向き、右手に花をもって立っている。左下には仏の方を向いて左手に花をもっている婆羅門が立っている。また右端には仏の方を向いて両手に花をもっている同じような婆羅門が立っている。その左上の方に今の婆羅門の方を向いて盆に花を盛って立っている女のような人物がいる。これは、婆羅門が女から花を求めて仏に供え、仏のゆく泥道に自分の髪を敷いて仏にその上を通るように請う、という物語を示しているものと思われる。

この図は非常に有名なものであり、四号窟の誓願画の主題一 (Alt-buddhistische Kultstätten, S. 241, Wall Paintings, Pl. xv. Bez. iii. N-V, Pl. xvi. Bez. iii N. O) に相当し、また、髪を敷いて仏の下に伏す婆羅門の図は高昌古址^B (Grünwedel: Bericht, Fig 79a) にもみられ、また Shorchuk (Ming-oi) 出土の木片の浮彫 (A. Stein: Serindia, vol. iv, Pl. cxxvii, left, Mi. ix. 001) にもみられる。ガンダーラの石の浮彫の中には、一女より花を求めて仏に献じ、布髪掩泥する人物をあらわすもの⁽¹⁾やただ布髪して跪く図⁽²⁾もある。燉煌には絹本に、鬚髪自ら落ち袈裟身につく沙門の身となる図を描くものがある⁽⁴⁾。これは善慧童子本生図(松本栄一博士による)⁽⁵⁾である。

Dīpaṅkara (燃燈、定光、普光) 仏は非常に有名な過去仏であり、南伝

では過去二十四仏の第一におかれる。釈尊はその前生においてこの仏のもとで発願して始めて授記をうけるといふ伝承 (Jataka Nidānakatha pp. 2f.) もあり、また、更にこの仏の以前にも多数の仏が出世し、釈尊はその前生においてこれらの仏のもとに供養し修行したといふ伝承もある (大毘婆沙論卷一七八、Mahāvastu 等)。この図の銘の扱っている根本説一切有部毘奈耶薬事では、燃燈仏は第二阿僧祇劫の最初の仏であり、それ以前にも多くの仏の出世が記されているのである。なお銘ではこの燃燈仏のところでは第二阿僧祇劫が終るのであるから、薬事の説とは異なるのである (後記)。

さてこの図に關係する物語とは、例えば四分律卷三二によれば、釈尊はその前生に於いて婆羅門の青年であったとき、定光仏が見えられると聞いて、苦心して花を求めて仏の為に散じ、仏のゆく泥道に自分の髪を敷いて跪き、成仏の誓願をたて、仏に、当来に釈迦如来となるといふ受記を蒙るといふ。この物語は多くの経律論にみられるものであるが、ただ菩薩の名は必ずしも一定していない⁽⁶⁾。

(1) Foucher: L'art gréco-bouddhique du Gandhāra, I, Paris, 1905, fig. 139, 141; Le Coq: Die buddhistische Spätantike Mittelasiens, I, Die Plastik, Berlin, 1922, Tafel 13a.

(2) Foucher, op. cit., fig. 140.

(3) ガンダーラ出土の燃燈仏像に因んで、興味あることには、この地にはかつて燃燈仏に関する遺跡があったと、法顯や玄奘が伝えている。高僧法顯伝には

「此より北に行くこと一由延にして那竭国城に到る。是れ菩薩が本と銀錢を以て五茎の華を質ひて定光仏を供養せし処なり」(大、五一、八五八下)

という。この那竭は現今のアフガニスタンの Jalalabad 地方であるといわれる(国訳一切経史伝部十六、14頁参照)。

また玄奘の大唐西域記卷二那揭羅曷国の条には、

「城の東二里に窠堵波あり、高さ三百余尺あり。無憂王の建つる所なり。石を編みて特に起せり。刻雕は奇製なり。釈迦菩薩が然燈仏に値ひ、鹿皮の衣を敷き、髪を布きて泥を掩ひ、受記を得し処にて、時劫壞を経るとも斯の迹は混ることなし。」(大五一、八七八下)

また

「其(城の西南の窠堵波)の東のかた遠からざるに窠堵波あり、是れ釈迦菩薩が昔然燈仏に値ひて、此に於いて華を買ひしところなり。」(大五一、八七八下)

という。なお大慈恩寺三蔵法師伝卷二(大五一、二二九中)、『釈迦方志卷上(大五一、九五四中)』参照。

なお美術研究第二二二号二四頁に高田修氏のあげる図(然燈仏伝説)、『シクリのストゥーパ基部』、『ラホール博物館』は Foucher, op. cit. Fig. 139 と同一で、『菩薩が一女より花を求めて然燈仏に捧げ、布髪掩泥してひざますく図』である。

(4) 松本栄一博士「燉煌画の研究」附図七二a 上段。

(5) このほか G. Ecke and P. Deméville: The Twin Pagodas of Zayton, Harvard, 1935, plate 32, E base 2 (Text p. 43) 及び E. Chavanne: Mission archéologique dans la Chine Septentrionale, pl. cclxxxiv (Fig. 432 左上) にて菩薩が花を求めるところが描かれている。なお E. Chavanne, op. cit. Fig. 1727a, p. 590 (Text); E. Waldschmidt: Gandhara, Kutscha, Turfan, Leipzig, 1925, pl. 52 (但し未見) 参照。

(6) この物語を伝える文献のうち主なものには次のようなものがある(然燈仏については、赤沼智善師「然燈仏の研究」(仏教研究六の三、大正一四年、後には「原始仏教の研究」所輯)、石川海浄氏「然燈仏思想に関する考察」(清水竜山記念論文集 昭和十五年) 参照。

四分律卷三一 (大二三、七八二―五) (定光如来、弥却摩納)

修行本起経卷上 (大三、四六一中―四六二) (錠光仏、無垢光梵志儒童)

過去現在因果経卷一 (大三、六二〇下―六二二下) (普光仏、善慧仙人)

太子瑞応本起経卷上 (大三、四七二下―四七三中) (定光仏、儒童)

六度集経八六 (大三、四七下―四八中) (定光如来、儒童梵志)

大乘本生心地観経卷一 (大三、二九五下) (然燈仏、摩訶仙人)

仏本行集経卷五 (大四、九二―九三) (定光仏、善思梵志子)

增壹阿含二〇・三 (卷一) (大二、五九七中―五九九中) (定光如来、雲雷梵志)

同 四三・二 (卷三八) (大二、七五七下―七五八下) (燈光仏、弥佉梵志子)

同 四四・一〇 (卷四〇) (大二、七六八下) (燈光仏(提和竭羅仏)、——)

仏本行集経卷三 (大三、六六五中―六六七下) (然燈如来、雲童子)

Mahāvastu, I, pp. 1, 231~248 (Dīpaṅkara, Megha)

Divyāvadāna, pp. 246~253 (Dīpaṅkara, Sumati)

Buddhavaṃsa, pp. 6~18 (Dīpaṅkara, Sumedha)

Jātaka Nidānakathā, pp. 2f. (Dīpaṅkara, Sumedha)

Dharmapadaṭṭhakathā, I, pp. 83~84 (tr. Burlingame: Buddhist Legends,

I, HOS. 28, pp. 193~194), Sūtra-Nīpāta Commentary I, p. 49, 参照

大智度論卷三〇 (大二五、二七六下) (然燈仏、須摩提菩薩)

同卷四 (八七上)、『同卷三五 (三一六中)、『同卷十六 (一八〇中)、『同卷七四 (五七九下)、『同卷八一 (六三一上) 参照。(なお E. Lamotte: Le Traité de la Grande

Vertu de Sagesse de Nāgārjuna, I, Louvain, 1944, p. 248 参照。そのほか

資料として Mar me mdzad kyis luh bstan pa = Dīpaṅkaravyākaraṇa

(但し未見) の指摘がある。(東北目録 No. 188 参照)。

∞ (Chotscho, Tafel 24, Prāṇidhi-Szene Nr. 8—115 頁別図 ∞ 参照)

// puṭṭo maṇiratnena Sunetro lokanāyaka

vihāreṇa ca rāmyeṇa śreṣṭhibhūteṇa me tada //

「世間の導師スネートラは、そのとき、長者であった私によって、珠の宝と

美しい精舎をもって供養された。」

(漢訳) 會作三長者一時 有佛名三善眼

我以三摩尼寶 供養此如来 (大三四、七四中)

/ tshoṅ-dpon-du ni gyur-ba-na /

/ hjiḡ-rtten ḥdren-pa spyān-mdses-la /

/ nor-bu rin-chen-gyis mchod-ciṅ /

/ gtsug-lag-khañ ni ñams-dgañs mchod /

(チルデ版 Kha 巻 277a3~4, 影印北京版41巻 222d6~7 * 北京版では .dgañs)

「(私が)商主となったときに、世間の導師善眼(スネートラ)に、宝石を
もって供養し、まことに快よい精舎をもって供養した。」

この図は四号窟主題一二に対比される。図の右下に左膝を地につけて
ひざまずき、仏の方にむかって、宝物を盛った盆を捧げている人物がい
る。この人物は銘にいう長者というよりは、むしろ王のようにみえる。
右の上方には建物がみられる。

9 (Chotscho, Tafel 25, Prapitdi-Szene Nr. 9—二五頁別図9参照)

// räña sutāham abhūvan pūrvaṃ anyasū jātiṣu

bhṛtāraṃ Ratnasikhi samdiparatia upasthitā //

* prathamasaṃkhyeyāsana //

* Prathamasaṃkhyeyā. が正しい形と考えられる。

「昔、他の生において、私は王子であった。兄弟のラトナシキン(佛)に燈
明が捧げられた。」

「第一阿僧祇〔劫〕の終り。」

(漢訳) 乃往過去世 會爲王子一時

寶髻佛兄弟 我以燈明施(大二四・七三下)

/ śhoṇ-gyi skye-ba gshan-dag-tu /

/ ña ni rgyal-pohi sras gyur tshe /

/ gceṇ-po rin-chen-gtsug-tor-la /

/ mar-meñi sbyin-pas mchod byas śiñ /

(チルデ版 Kha 巻 276a5, 影印北京版41巻 222c1.)

「前の他の生に於いて、私が王の息子となりたとき、兄の宝髻(佛)に
燈火の施をもって供養し、」

この図は四号窟主題三(Altbuddhistische Kultstätten, S. 239, Wall

Paintings, Pl. xviii, Bez. iii. S-U)に相当する。左下にひざまずいて仏に

むかつて香炉を捧げる王の姿が特徴的で、二号窟の壁画断片(Chotscho,
Tafel 37)も同様の図であり、また西域考古図譜12、15も左右反対では
あるが、これと類した図である。なお四号窟の図では、王は燈明を捧げ
るのであるという。Grünwedel の Bericht, Tafel vi. (Tidkutschari Ruine
a)にも同じような王が燈明を捧げる図がある。

Ratnasikhi は、過去仏の名としては根本説一切有部毘奈耶葉事卷六

(大二四・二五) (宝光佛)や Divyavadana (pp. 62f.)にみえる。それによれば

宝光仏は、中天竺の摩娑婆(Vasava)の大臣の子として生れ、後に出家し

て宝光(Ratnasikhi)如来となる。時に北天竺の多財王(Dhanasaṃmata)

と摩娑婆王が戦を始めようとする。仏は摩娑婆王の軍を光明をもって照

らしたので、多財王はおそれて両王は和す。摩娑婆王は仏の下に発願し

て転輪王とならんといい、多財王は成仏せんと発願する。仏は授記して

それぞれ転輪王餉佉(Saṅkha)、弥勒仏になるべしという。但し、これ

は弥勒当来成仏縁譚というべきものであって、ここには釈尊の前生に

関係するものがないから、今の図や銘のもとづいている物語ではないよ

うである。

10 (Chotscho, Tafel 26, Prapitdi-Szene Nr. 10—二五頁別図10参照)

// Utaro māṇavo bhūvaṃ kāsyaṃ divipadottame *

Nlandipjalavaca sṛutvā pravrajyā kṛta matih **

trīyasaṃkhyeasaravaguṇabhyaśvasanāh //

* Lüders にしたがって Kaśyapa とよむ。

** Huber は義浄訳《菩薩》より Nandipāla と考えた (op. cit. p. 12)。ここは正しくは Nandipālāvācam とすべきところであろう。

*** 正しくは *trītyāsamkhyeya* であると考えられる。

「私はウッタラという学童であった。両足尊カーシユヤバのもとに、ナンディパーラのことを聞いてから、出家する決心をした。」
「第三阿僧祇〔劫〕の一切の徳の修行の終り。」

(漢訳) 昔爲_二梵志_一名_二最勝_一 於_二兩足尊_一迦葉佛_一

由_二聞_一喜護所説語_一 乃得_二出家_一修_二淨意_一 (大二四、七五中)

/ bram-zeḥi khyeḥu ni bla-maḥi tshe /

/ dgah-skyoñ-gi ni tshig thos-nas /

/ ḥod-sruñ^{*} rkañ-gñis-mchog-las ni /

/ rab-tu-hbyuñ-baḥi blo bskyed-do /

(フルゲ版 Kha 帙 279a 1, 影印北京版41巻 p. 22361~2, *北京版では ḥod-brun)

「私が(最勝(ウッタラ))という婆羅門青年であったときに、喜護(ナンディパーラ)のことを聞いて、両足尊迦葉のもとに、出家する決心をした。」

この図は四号窟の誓願画の主題四に相当する。また一九号窟の壁画断片 (Wall Paintings, Pl. xxviii, Bez. xii: 1) はこの図の左上部に相当するようである。左下に右膝を地につけてひざまずいて偏袒右肩して合掌している若者がいる。これが、釈尊の前生たる菩薩と考えられる。

迦葉仏の下における陶師とその友人(菩薩)の物語は、阿含以来伝承されてきた有名な物語である。ただ、この二人の名は必ずしも一致を欠くが、迦葉仏出世のときに、陶師のすすめによってその友人(菩薩)は出家した。陶師は仏に種々に布施をして奉仕したという物語の骨子は殆んど

類同である。この物語を伝える文献には次のようなものがある。(1)

(1) Majjhima-Nikāya No. 81 Ghaṭṭikāra-sutta (II, pp. 45f.), (Ghaṭṭikāra, Jotipāla)

Samyutta Nikāya I. 5. 10 (pp. 35~6), II. 3. 4 (p. 60), (Ghaṭṭikāra, —)

Jātaka Nidānakathā (I, p. 43) (Ghaṭṭikāra, Jotipāla)

Mahāvastu I, pp. 319~338 (Ghaṭṭikāra, Jyotipāla)

Buddhavaṃsa, p. 62, Apadāna p. 301, Milindapañha, p. 222 参照。

中阿含六三鞞婆陵耆経 (大一、四九九上—五〇三上) (難提波羅陶師、優多羅摩納)

雜阿含五九五 (卷二二) (大二、一五九中下) (難提婆羅、——)

別訳雜阿含一八九 (卷九) (大二、四四二中下) (難提婆瓦師、——)

根本説一切有部毘奈耶葉事卷一八 (大二四、九六中) (喜護陶師、無上摩納婆)

N. Dutt: Gilgit Manuscripts, vol. III, pt. 1, p. 217, (Nandipāla, Uttara)

興起行経卷下 (大四、一七二下—一七四上) (難提婆羅(護喜)、火燮)

仏五百弟子自説本起経 (大四、二〇二上) (難提和羅、——)

大智度論卷三八 (大二五、三四〇下)、卷二七 (同二六一下) (難提婆羅、鬱多羅)

根本説一切有部毘奈耶出家事卷二 (大二三、一〇二九下—一〇三〇上) (一教師、囉恒囉婆羅門)

なお根本説一切有部毘奈耶葉事卷一五 (大二四、七三三)、大毘婆沙論卷一七七 (大二七、八九一) 参照。ここには同じような説話が、往古無量劫時の釈迦牟尼仏の弟子の話となっている。

11 (Chotscho, Tafel 27, Prāñidhi-Szene Nr. 11—12 頁別図 11 参照)

// vāsīsthasyagamananāṃ śrūtvā sresṭhī prīṭimanā bhavan^{**}

udyananāṃ maṇḍayitva ca viharanāṃ karayāmy aham

* 正しくは *sresṭhī* であろう。 ** *prīṭimanā* と考えられる。

「ブーシシュタ(佛)の到来を聞いて、長者の私は心よろこんでいた。そして私は園林をかざり、精舎を作らせる。」

(漢訳) 昔爲_二商人_一時 聞_二佛名_一淨住_一

欲_二來造_一寺舍 園苑毘訶羅_一 (大二四、七五上)

/ tshoñ-dpon gyur tshe yañ dgah-bas /

/ gnas-hjog gśegs-pa thos-nas ni /

/ bskyed-mos-tshal ni brgyan byas-nas /

/ ñas ni gtsug-lag-khañ brtsigs-so /

(デルゲ版 kha 帙 278a7~b1, 影印北京版 41 卷 p. 223b1~2, * デルゲ版には skyed.)

「(私が)商主となったときにも、よろこんで浄住(佛)の御到来を聞いて、園林をば飾り、私は精舎をたてた。」

この図は四号窟の誓願画の主題一二(Kultstätten, S. 241, Wall Paintings Pl. xiv. Bez. iii. C-F)にあたる。右下には坐具に坐って両手に衣を捧げる老比丘がいる。その上には合掌する比丘、その上は執金剛(Vajrapāni)、左下には立って合掌する人物、その上に立って合掌する比丘がいる。このうちどれも銘にいう長者にあたるものはいない。これは銘と図との合わないものの一つである。

12 (cf. Chotscho S. 15a, Prapidihi Szene Nr. 12)

九号窟寺の誓願画の第一二と第一三にあたるものはルエックの図版には欠けている。わずかにその記述から推定するだけである。それによれば、右下には若い僧に剃髪をしてもらっている菩薩がいるというから、四号窟の主題一四と一致するものである。四号窟のその図は Wall Paintings によってその右辺(Pl. xix, Bez. iii. A. B)と左の上部(Pl. xiv Bez. iii. C-F)とが見られる。アンドリエースは、剃髪をうけているのは釈迦族の王子で、剃髪をしてやっているのは Upāli だと考える(Catalogue of Wall Paintings from Ancient Shrines in Central Asia and Sistan, p.

ベゼクリク第九号窟寺銘文による誓願画の考察

71)。これを確かめることはできないが、今までの例から考えられることは、誓願図は釈尊の前生における修行を示すのであるから、ここでも釈尊がその前生において過去仏のもとに出家することを主題にしたものと思われる。

13 (cf. Chotscho S. 15, Prapidihi-Szene Nr. 13)

// * tṣibhūto hy upātiṣṭham [s]……trelokanāyakam
valkalena manāpenāchādito……nā maya

* これは Lüders の解説したものをあげた。

** 漢訳《善眼》, チベット訳 spyān-mdses であるから Sunetraṃ とあるところだろう。

*** Chotscho S. 15b では -tā と読んでいる。チベット訳によれば、この個所は mi-yi-mchog 即ち narottamaḥ とも考えられるが、長すぎるから不適當である。漢訳には世尊の語があるから、(bhaga)vā(m)であるのかもしれない。tā と nā とは斜形グプタ文字では辨別がわしいものであるが、vām であったとしても、それが少し破損していれば、tā や nā とも見えるものと考えられる。それで私は今は一応 (bhaga)vā(m) と考えてみる。

「実に仙人であった(私は)三界の導師(スネートル)に奉仕した。〔世尊は〕私によって快よい樹皮の衣を着せられた。」

(漢訳) 往昔作仙人、見善眼世尊、

以三萎樹皮衣、持施覆其身。(大三四、七四七)

/ hjiḡs-rten ḡdren-pa spyān-mdses-la /

/ drañ-sroñ gyur tshe bkur-ste byas /

/ śiñ-śun yid-du ḡoñ-ba-yis /

/ ñas ni mi-yi-mchog bkab-po /

(デルゲ版 kha 帙 276b2, 影印北京版41卷 p. 222c5)

「世間の導師善眼に、(私が)仙人となったときに、供養して、快よい樹皮をもって、私は人中尊に着せた。」

この図もルネッサンスの図版に欠けている。しかしその説明によれば、図の右下には豹の皮を捧げてひざまずく髭ぶかい婆羅門がいる。そのうしろには庵が見える。左下には虎の皮を捧げている二人の婆羅門が右の方を向いて立っているという。これは四号窟寺の誓願画の同じ場所のもの(主題一五)にあたるものと思われる。ただし、四号窟のそれは、左下には一人の婆羅門がいるにすぎない(Wall Paintings, Pl. xix. Bez. iii. A. B. right)。

14 (Chotscho, Tafel 28, Prap̄idhi-Szene Nr. 14—二六頁別図12参照)

// Aṅgirasam ahaṃ dṛṣṭvā nadīdiram upāgatam
sārthavāhena me nāvā nadyām uttārīto munim^{**} //

* nadīdiram とよむ。 ** uttārīto munim とよむ。

「私はアングラス(佛)が川の岸に来たのを見て、隊商の頭であった私によって、牟尼は川を舟によって渡らせられた。」

(漢訳) 有佛欲渡河 我曾作_二船師_一

見佛心歡喜 渡佛到_二彼岸_一 (大三四、七四下)

/ ṅa ni mñan-par gyur-pa-na /
/ śiñ-rtāḥi yan-lag chu-ḥgram-du /
/ byon-pa ṅas ni mthoñ-nas ni /
/ thub-pa chu-yi rgyun-las bsgral /

(デルゲ版 kha 帙 277b3, 影印北京版41巻 p. 222e5)

「私が船頭となったときに、車支(佛)が川の岸に来たのをば私が見て、牟尼を水の流を渡した。」

この図は四号窟の誓願画の主題五に相当する(Wall Paintings, Pl. xvii GK 参照)。中央の仏は左の方を向き、川に浮かぶ小さな舟の上に立っている。左下には髭深い男が帽子をかぶり、両手に食物を盛った盆を捧げて坐っている。その上には髭深い男が二人合掌している。右下には荷を負ったらくだとろばがいる。その上方には髭ぶかい男が九つの袋を盛った盆を捧げている。その上の方にも髭ぶかい男が合掌している。ここでは銘と図とは関係ぶかい。

15 (Chotscho, Tafel 29, Prap̄idhi-Szene Nr. 15—二六頁別図13参照)

// [vidhi]vat pūjita buddh(o)……[puna^{**} manorathaḥ]
dharmarājya[m] ca me (prāptaṃ^{***} rā)jabhūtena śraddhaya //

* この銘は破損して判読しがたい。今は Lüders の解読にしたがう。

** Lüders は pūrṇo manorathaḥ と読むべきであろうかといっている。私は pūrṇamanorathaḥ と考える。その前のブランクは mayā とでもあるのだろう。

*** 漢訳では《名》法王、チベットでは bsgrags であるから、proktaṃ とあるのかもしれない。

「如法に、「プールナ」マノラタ佛は、王となった[私によって]信をもって供養された。そして私は法王と称せられた。」

(漢訳) 我昔爲_二國王_一 種種供_二養佛_一、

滿足皆隨喜 起_二塔名_一法王 (大三四、七五上)

/ rgyal-por gyur tshe dañ ṅas ni /
/ sañs-rgyas gañ-po-re-skoñ-la /
/ tshul dañ ḥdra-bar mchod byas-te /
/ chos-kyi rgyal-po shes bsgrags-so /

(デルゲ版 kha 帙 278a3, 影印北京版41巻 p. 223a4~5)

「(私が)王となったときに、私は意樂圓滿佛に如法に供養して、法王と称せられた。」

この図は四号窟の誓願画の主題六に相当する。左下には跪いて仏を招く髭ぶかい男がいる。右下には供物を盛った盆を捧げる髭ぶかい男がいる。ルコックはこの二人の人物をば婆羅門とみている。とすれば銘のいう王とはあわないのである。左下の人物と右下の人物とは、同じ人物の一連の行為を示すものと考えられる。

三 誓願画補遺

以上九号窟寺の誓願画を、ルコックのあげる順序⁽¹⁾にしたがって見てきたが、その銘は一偈(4)を除いては全て根本説一切有部毘奈耶薬事の中に見出した。そしてその二、三の図に関してはその物語の典拠を示すことができた。ところで、この銘の中には供養(pūjita)の語はみられたが誓願(prañidhana)や授記(vyakarana 記別)の語はみられなかった。ただ例えは7の燃燈仏と儒童との図から、その図が、成仏の誓願を立てて髪を仏のゆく泥道に敷いて跪く菩薩に、仏が授記をあたえることを主題にすることがわかるにすぎなかった。これについてはスナールの報告する壁画の銘が示唆をあたえるものと考えられる。⁽²⁾ スナールは Donner と Klementz の探検(一八九八)が Singimaus (勝金口) から将来した壁画の銘の写真を解読しているが、これは誓願画と関係するものと考えられる。その銘は次のようなものである。

Kanakamunibuddhaya kṛtvāramam vṛtasthiva
yathalabdham vyakarānam tathā vyakṛtam apnuyam (JA. xv. p. 354)

ベゼクリク第九号窟寺銘文による誓願画の考察

「カナカムニ佛のために(私は)園林をつくり、法に立ち、受記を得た通りに受記されたこと(即ち未来成佛のこと)を私が高得ますように。」

Kanakamunijñāya śakyamuni [s]ṛṣṭeṣṭhi bhūtvāramam

kṛtvā bhikṣuṃ[?]……ptamahābodhaye (p. 355)

「カナカムニ勝者のために、シヤカムニは長者となって園林を作り、比丘……大菩提のために……」

この中、後者は薬事卷一五の偈の中に相当するものであると考えられる。⁽³⁾ さて、前の銘には受記の語がみられたが、もしこの壁画が誓願画であれば、我々は、それが誓願と授記とを主題とするものであるということとを明らかに知ることができようである。

(1) この順序をどう考えるかについては問題がある。リューデルスは三阿僧祇劫の点から、(1) 1 2 4 5 9、(2) 3 6 8 11 7、(3) 13 12 15 14 10の順と考えた。もし薬事の偈の順序によれば、(1) 9 13、(2) 7 2 5 1 3 6 8 14、(3) 15 11 10となる。もしこれらの図が薬事の偈にもとづいているとすれば、その順序については、あまり顧慮されなかったものとも考えられる。

(2) E. Senart: Note sur quelques fragments d'inscriptions du Turfan,

Journal Asiatique, xv, 1900, pp. 353f.

(3) 昔爲ニ商人ニ深正信 見ニ仏迦耶迦牟尼

先造ニ立寺ニ生ニ恭敬一 後乃方隨佛出家(大二四、七五中)

/ tshoh-dpon-du ni gyur-pa-na /

/ yan-dag saṅs-rygas gser-thub-la /

/ gtsug-lag-khan brtsig dad-pa-yis /

/ khyim med-par ni rab-tu-byun /

(チルテ版 Kha 帙 278b7-279a1, 影印北京版41卷 p. 223c1)

「(私が)商主となったときに、カナカムニ正覚者に、精舎を建て信解することにより、無家に出家した。」

四 根本説一切有部の律と誓願画

次に誓願画の銘の由来したと考えられる根本説一切有部の律について考えてみよう。

根本説一切有部の律は老大な譬喩 (Avadana 即ち前生物語や因縁譚) を含んでいる (特に薬事、破僧事、雜事)。そしてその因縁譚では「仮令経百劫、所作業不亡、因縁会遇時、果報遷自受⁽¹⁾」という偈が繰返されるように、善因善果、悪因悪果を強調する。この業報の法則は积尊といえども免かれない。この律の含む多くの本生譚では、积尊がその前生で多くの善行を積んだことが語られる。また积尊もこの世で苦しみをうけたが、それは前世のわるい行為によるものであると説明する (薬事卷一八、なお興起行経参照)。過去仏が登上するのもこの業報の思想に相応する。即ち积尊はその前生に於いて、過去の諸仏のもとに供養し善行を行い、諸仏によって、未来に成仏するという受記を蒙ることを説くのである (薬事卷一五、なお誓願画はかかる思弁を描いたものと考えられる)。薬事について見れば、初めと終りの数巻を除けば主に因縁譚だけである。そして卷一三から卷一五にかけては、「世尊本生修福因縁事」 (国訳一切経律部二三) というわけ、三二の本生譚があげられている。卷一五末にいたって過去仏を出すのは、それら本生譚のしめくりともいべきものであり、「初めより乃し成仏にいたるまで幾何の諸仏に供養して而して無上菩提を証したまへる」という問に答えるものである。そこには三阿僧祇劫に出世した諸仏のべられている。初めに散文の中に略説し、次に偈の中にくわしく説く。即ち、第一阿僧祇劫には积迦如来より護世仏にいたる七万五

千仏、第二阿僧祇劫には燃燈仏より宝髻仏 (偈では帝釈幢佛) にいたる七万六千仏、第三阿僧祇劫には宝髻仏 (偈では安隱日佛) より安隱仏 (偈では迦葉佛) にいたる七万七千仏、及びまた迦提波仏 (偈ではこの佛は第三阿僧祇劫の出世とされている) のもとに、积尊はその前生に於いて供養し、諸仏によって、無上菩提を証すべしという受記を蒙ったという。これを詳しく説く偈の中には五十余の仏の名があげられ、そのもとで积尊がその前生で修行し仏に供養したことが記される (そのうち一三の偈が誓願画の銘と同一なのである)。

ところで三阿僧祇劫にわたって出世する過去仏をあげるものには、他に大毘婆沙論卷一七七〜八 (大二七、八九一、中一八九二下)、俱舍論卷一八 (大二九、九五上)、俱舍論卷十三 (四九中下)、順正理論卷四四 (五九一上) 等の説一切有部の論書がある。大毘婆沙論卷一七八 (大二七、八九三下) によれば、第一劫阿僧祇耶には积迦牟尼より宝髻にいたる七万五千仏、第二劫阿僧祇耶には宝髻より燃燈にいたる七万六千仏、第三劫阿僧祇耶には燃燈より勝観 (Vipassin) にいたる七万七千仏、更に九十一劫には勝観より迦葉波にいたる六仏が出世したといひ、仏名は薬事とは少し異なっている。更にまた、大智度論卷四 (大二三、八七上) には、初の阿僧祇劫には积迦文仏より刺那尸棄仏、第二阿僧祇劫には刺那尸棄仏より燃燈仏、第三阿僧祇劫には燃燈仏より毘婆尸仏にいたるといひ、この間、积尊は修行を積んだという。また優婆塞戒経卷一 (大三四、一〇三九上) には、积尊は积迦牟尼仏のもとに発心し、宝頂仏の所に第一阿僧祇劫を満足し、燃燈仏の所に第二阿僧祇劫を満足し、迦葉仏の所に第三阿僧祇劫を満足したという⁽²⁾。

さて誓願画にかえって見ると 6 Ratnasikhin 宝髻仏で第一阿僧祇劫が

終り、7 Dipankara 燃燈仏で第二阿僧祇劫が終り、10 Kasyapa 迦葉仏のところまで第三阿僧祇劫が終ると記されている。このうち、第三は菓事の偈と合うものであるが、第一と第二はむしろ大毘婆沙論等及び大智度論の説と一致し、更に第一、第二、第三とも優婆塞戒經の説と一致するものである。

最後に誓願画のもついでに物語について見るならば、燃燈仏、迦葉仏、Kṣemaṅkara 仏については、本生経や譬喩 (Avadāna) の中に典拠をあげることができた。しかし大部分については菓事の偈以外には手掛かりが得られなかった。菓事の因縁物語には他の文献を引用し、或は他の文献を予想するものがあり、卷一五末の過去仏をあげる偈にしてもそれぞれ詳細な物語を予想することも考えられる。これについては今後の研究に期待したい。ただ、誓願画の銘と同じではないが、類似する偈にはマナーブスツ (III, pp. 248-9) があげられ、また三阿僧祇劫に出世の仏については Diyyavadāna があげられるように、誓願画はいわゆる譬喩文学 (Avadāna) と関係が深いことが知られる。

(1) この偈は義浄訳根本説一切有部の律にしばしばみられ、その毘奈耶には一〇回 (例えば大二三、六五七下)、菓事には一一回、破僧事に七回、雜事に四回、皮革事及び毘奈耶毘奈耶にもみられる。この偈は Avadānaṭaka (例えば I, p. 74) にも多く (五五回) 見られ、その漢訳の撰集百緣經 (大四、二三三中、二四六上) にもみられ、Diyyavadāna にも知られるように、譬喩文学 (アバダーナ) に関係が深い偈である。なおそのサンسكريット文は次の通りである。

na prapāṣyanti karmāni api kalpaśatāni api /
 samagṛiṇ prāpya kālaṃ ca phalanti khalu dehinam //
 (N. Dutt: Gilgit Manuscripts vol. III, pt. I, p. 108, Avadānaṭaka I, pp.

ベゼクリク第九号窟寺銘文による誓願画の考察

74, 80, etc. 參照)

「諸々の業はたとい百劫(経った)としても滅しない。しかも(因縁の)和合と(その)時を得れば、(業は)必ず有情に結果をもたらす。」

(2) 三阿僧祇劫に出世した仏の名を、以上の出典によって表示すると次のようになる。

(出典)	(第一阿僧祇劫)	(第二阿僧祇劫)	(第三阿僧祇劫)	(九十一劫)
大毘婆沙論 卷一七八	釈迦牟尼より宝髻 七万五千仏	宝髻より燃燈 七万六千仏	燃燈より勝觀 七万七千仏	勝觀より迦葉 六仏
根本説一切有部 毘奈耶菓事 卷一五、散文	釈迦如来より護世仏 七万五千仏	燃燈仏より宝髻 七万六千仏	宝髻仏より安隱 七万七千仏	(迦葉波仏)
同 偈	右に同じ	燃燈仏より帝釈 七万六千仏	安隱日仏より迦葉仏 七万七千仏	—
大智度論 卷四	釈迦文仏より刺那尸棄仏	刺那尸棄仏より燃燈仏	燃燈仏より毘婆 七万七千仏	—
優婆塞戒經卷一	釈迦牟尼仏 宝頂仏	—	燃燈仏	迦葉仏
Bāzālik Tempel 9	Ratnaśikhin	Dipankara	Kāśyapa	—

なお、ルーデルスが指摘したように、Diyyavadāna 〇 Dharmacaryavadāna には、第一阿僧祇劫に Kṣemaṅkara (Cowell & Neil ed. p. 242)、第二阿僧祇劫に Dipankara (p. 246)、第三阿僧祇劫には Krakucchanda (p. 254) 仏が出世したことを語る。

釈尊の前身としての菩薩の修行の時期の長さを幾何とするかは伝承によってちがいがあふ。以上にみた例は三阿僧祇劫とするものであった。しかるにセイロン等に伝えられている南伝では四阿僧祇劫といふ (Buddhavaṃsa, p. 6, 南伝大蔵経四一、二一九頁、Jātaka Nidānakathā, pp. 3, 44, 南伝大蔵経二八、六頁、九三頁)。そのはじめに、ディーパンカラ仏 (燃燈仏) が出世し、その仏の下で、婆羅門と生れた釈尊の前身の菩薩が発心して修行するといふ、以下迦葉仏まで、過去二十四仏をあげるのがある。

大乘仏教では成仏を志す修行者たちが菩薩と称されるのであるが発心以来成仏までには三阿僧祇劫を要するという説がある (菩薩地持經卷九、大三〇、九五二中下、瑜

伽師地論卷四八、大三〇、五六二上、Bodhisattvabhūmi, II, p. 355; 大乘莊嚴經論卷七、大三一、六二二下、六二六中、Mahāyāna-Sūtrālamkāra, pp. 90, 96; 玄奘訳撰大乘論本卷下、大三一、一四六上、世親造撰大乘論積卷八、大三一、三六〇中、無性造撰大乘論積卷七、大三一、四二五下、真諦訳撰大乘論卷下、大三一、一二六下、撰大乘論積卷一、大三一、二二九中、仏陀扇多訳撰大乘論卷下、大三一、一〇七中、笈多共行矩等訳撰大乘論積論卷七、大三一、三〇四中、真諦訳大乘起信論、大三二、五八一中、実叉難陀訳大乘起信論卷下、大三二、五八九下、参照)

五 結 び

以上を通じてわかったことは次のように要約できる。

一、誓願画は一見、仏を礼拝供養する図にみえるが、そこには釈尊がその前生において過去の仏のもとに成仏の誓願を發し、修行して、その仏より未來成仏の受記を蒙ることを主題にしたものと考えられる。

二、誓願画の銘は根本説一切有部毘奈耶菓事の偈の中に見出される。

三、銘にいう三阿僧祇劫に出世した仏の名は、一部は菓事の説に、他は大毘婆沙論等の有部の論書及び大智度論に知られる説によっているが、それは優婆塞戒經に伝えるものと合うのである。

四、誓願画の主題となる物語の二、三は、譬喩 (Avadana) をはじめ多くの文献に知られているものであるが、他の大部分は菓事の偈以外には手掛かりが見出せなかったものであり、今後の研究に期待すべきものである。

〔付 記〕

本稿ができるまで、これまで、中央アジアの美術について御教導いただいた

た熊谷宣夫氏、印度学仏教史学の御指導を下された金倉圓照、山田龍城、羽田野伯猷の諸先生、また小論をこのような形で発表させていただいた美術研究の編輯の方々の御厚情をありがたく思います。しかるに小論は十分にこれらの御恩にお報いすることができないことをはするとともに、またいろいろ御教示や御鞭撻がわたくしに与えられますれば幸いです。